

## 三康文化研究所附属三康図書館

昨秋の11月20日、芝にある三康文化研究所附属三康図書館を訪問した。

同館はたいへん数奇な運命をたどってきた図書館である。同館職員の水野薩男氏はその前史を淡々と語ってくれた。前身であった大橋図書館の歴史は、明治34年に当時の大手出版社、博文館の社主であった大橋佐平が図書館の設立を出願したことにはじまる。麴町区上六番町（現千代田区三番町）にあった大橋邸の一隅で着工されたが、佐平は完成を見ることなくその槌音を聞きながら病没する。嗣子の新太郎が志を継ぎ翌35年に開館。当時の日本では珍しい財団法人による公共図書館の誕生である。当初約4万冊だった蔵書は、大正12年には8万8千冊に増え、書庫の新築も計画されていた。その矢先、関東大震災によって全蔵書は三階建ての書庫もろとも灰燼に帰した。大正15年、麴町区九段1丁目（現在の九段会館の前）に移り再出発をはかる。総工費12万5千円、鉄筋コンクリート本館4階書庫6階建ての新館は大橋家の財産の3分の1を費やしたといわれ、新太郎の図書館にかける執念がうかがわれる。昭和17年頃には蔵書約18万冊にまで発展し、日本有数の私立図書館となった。同館は入場有料制だったが、子供は無料であり、児童書を充実させるだけでなくマリオンネットなどの催しものも行っていた。

昭和19年に新太郎が没し、戦後の混乱が追い討ちをかけ、大橋図書館は存亡の危機に陥る。戦災を免れたにもかかわらず



ず、建物は人手に渡った。新宿に移転し細々と開館していたが、昭和28年について解散。蔵書は堤康次郎に引き継がれた。「大橋図書館」の名を残し、豊島園に開設する構想もあったが、結局、昭和32年芝公園に三康図書館として生まれ変わった。その後、仏教文化の研究を目的とする三康文化研究所の付属図書館となり、昭和54年に現在の建物となった。

水野氏の案内で三層の書庫を順次見学した。現在の蔵書は研究所の性格上仏教書が中心だが、旧大橋図書館の蔵書は、主に戦前期までの宗教書、地誌、古地図、法律書、美術書、文芸書、パンフレット、児童書、雑誌、新聞、および江戸期の絵巻物、黄表紙、書状など多彩である。和図書は大橋図書館独特の五十音分類と大きさによって分類されている。ほかに、水哉文庫（坪谷善次郎旧蔵）、江見水蔭作品手沢本集書、杉村兄弟文庫（約360冊、主に詩歌、杉村楚人冠寄贈）、戦時下閲覧禁止本（約6000冊、主に思想書）などがあり、旧大橋蔵書以外には、椎尾文庫（約9500冊、椎尾弁匡元館長旧蔵の仏教書）、内田文庫（約4000冊、内田護文旧蔵の法律関係書）、竹田宮文庫（約8800冊、主に軍事・歴史関係）がある。

40席の閲覧室は静かで落ち着きがあり、喧騒に満ち図書館に慣れた私たちにはかえって新鮮で印象的だった。

（参考 課 石川武敏）